
魔法少女リリカルなのは StrikerS 天空ヲ舞ウ白キ自由

白銀の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Strikers 天空ヲ舞ウ白キ自由

【Nコード】

N8335Z

【作者名】

白銀の翼

【あらすじ】

メサイア攻防戦、ユニウス戦役から数ヶ月経ったC・E・75。

あれから大戦は起こらず、世界各国はプラントと連携を取りながら復興作業とナチュラルとコーディネイターの解り合いを進めていった。

だが、それと同時に世界各国に所属不明艦隊が現れるようになった。

連合軍の残党とオーブ、ザフトはそれぞれ連携を取り、この火の粉を払うようになった。

そんなある時、所属不明艦隊がデブリ帯で停泊しているという情報を得たキラ・ヤマトは愛機を携えて出撃したが。

一方、新暦75年となったミッドチルダでは、時空管理局のある試験部隊とある次元犯罪者の戦いが始まるうとしていた……。

今回で書き直し第何弾なんだろう……。

いい加減しつこいという方や気に入らないという方は回れ右を下して下さい。

あれ、何か変とかいうのはスルーの方針をお願いします

自由ガ旅立ツ時

ユニウスセブン落下による”ブレイク・ザ・ワールド”から”メサイア攻防戦”までの戦乱、”ユニウス戦役”から一年が経過した。

あれから、世界は地球の各国と”プラント”で連携を取り復興作業とナチュラル、コーディネイターの解り合いに尽力している。

だが、それでも混乱は治まらなかった。

所属不明艦隊が、地球や”プラント”を襲うという混乱が起きたのだ。

各国は復興を進めると同時に地球連合軍（残党）、オーブ軍、ザフト軍とそれぞれ連携を取り撃破。

何とか火の粉を払っている状態だった。

デブリ帯^{ヘルト}

無数の戦艦やモビルスーツの残骸、岩塊が浮かぶ漆黒の空間の中、一機のモビルスーツが辺りを見渡しながら漂っていた。

純白の四肢、黒と青のツートンカラーのボディ、黄金に輝く関節と両手と胸部砲口、両腰部に灰色の砲身とビームサーベルの柄、黄金の両手に握る二丁のビームライフル、そして何より目を引くのは背中に抱く深蒼の八枚の翼。

その背に”自由”の翼を抱く大天使『ZGMF-X20A”ストライクフリーダム”』である。

「可らしいな……」。

ついさつきここで所属不明艦隊が停泊しているって情報が来たのに、何故こんな蛻の殻なんだ？」

コックピット内で、パイロットのキラ・ヤマトがポツリとこちる。

この宙域で所属不明艦隊が停泊しているという情報を得て、自らの所属であるザフト月軌道艦隊、戦艦”ミネルバ”から愛機を携えて発進したが、結果はこの状況だ。

だが、慌てて逃げたにしても余りにも鮮やか過ぎる。

強大なザフト月軌道艦隊と大戦で大いなる活躍をした”ミネルバ”、”ストライクフリーダム”が来ると解ると大抵の組織やテロリストは慌てて逃げ出す。

その逃げ出す際に重要な機密データやプログラムを置いていく事があるが、それが全く無いのだ。

まるで最初からその場にいなかった様に。

「仕方ない……」。

もう少し調べてみるか……」

そう呟いて、スティック操縦桿を動かした時だった。

突然、ガクンと機体が強く揺れて、何かに引っ張られ始めた。

「な、何だ!？」

原因を探そうと、キラの頭部のメインカメラを動かした時、それは映った。

宇宙のど真ん中に出来た白く輝く球体が、機体を吸い込んでいる。

キラはそれから逃れようと必死に操縦桿を動かし、フットペダルを踏むが、結果は変わらない。

寧ろそれ所か、吸い込みがどんどん激しくなっていく。

更に球体に近づくに連れて、機体のシステムがどんどん死んでいく。

計器も、武装も、ハッチも、何もかも。

そして

「うあああああ!！」

機体ごと完全に吸い込まれて、キラの叫び声と共に球体は姿を消した。

紅蓮ノ中ノ邂逅（前書き）

つ、疲れた……。

上手く書けてるか……？

紅蓮ノ中ノ邂逅

「……………熱い……………」

身体を焼き尽くす炎の熱の熱さでキラは目を覚まし、そして驚愕した。

「なっ……………!？」

僕は今までデブリ帯にいた筈なのに!？」

視界に映るのは炎、炎、炎。

橙色の炎が、辺りを焼いていた。

立ち上がり、目を凝らして見てみると炎が焼いている空間は結構広く、また見たことが無い。

服を見てみると、パイロットスーツからザフトの白服に変わっており、更に”FAITH”の徽章が左胸に着いている。

更に気になるのは機体の在り処だ。

あの巨大な人型兵器を見つけるのは容易いが、室内にいるせいで今は見当たらない。

「あの球体に吸い込まれて……………一体何が……………?」

機体がどうなったか気になる所だが、今はこの状況だ。

速くここから脱出して、情報を集めた方が良い。

コツコツとブーツを鳴らしながら炎の中を歩いていくと、誰かの声が燃え盛る炎の音を摺り抜けてキラの鼓膜を刺激した。

「う……グスツ……ギン姉、お父さぁん……何処？」

「ん？」

誰かいるのか？」

声の主を捜そうと、顔を数回左右に振ると、そこにいた。

目測で6メートルはある女神像の前で、青い髪の少女がうずくまりながら泣いていた。

その姿に、キラの脳裏にある光景が映る。

炎に包まれていく小型脱出艇、真空の塵となりゆく紅い髪をした美しい少女。

謝りたかった、ただごめんなさいと言いたかったと後悔し、本当の思いがキラを守ると言ったあの少女の姿が。

もうあんな思いは二度と繰り返さないと決めた、あの光景。

あの少女を見逃すと、またあの思いを繰り返してしまう。

気付くとキラは、あの少女に向けて駆け寄り視線を合わせていた。

「大丈夫？」

「ひつく……ふえ……？」

「立てるかい？」

「ふ、う……うん……」

何とか涙を拭い、両の脚で立つ少女に見ていたキラだが、後ろにある女神像に視点を向けた時に驚愕に染まった。

ビキ、ビキビキ、ボコッ！

女神像の土台に亀裂が走り、少女とキラの方に向かって倒れてきたのだ。

「キヤアアアアア！！？」

「くうっ！！」

迫り来る死の恐怖に目を臥せる少女。

キラの常人を遙かに上回る反射速度を以ってしても、二人とも助かるのはほぼ不可能に近い。

なら、どうするか。

それは、決まっている。

「ゴメンね！」

キラは少女の身体を右方に投げ飛ばし、倒れてくる女神像の範囲から少女を出させる。

「お兄さんっ！」

少女の叫び声が耳に入るが、頭にまでは入って来ない。

倒れてくる女神像が、かなり遅く見える。

これでもう、後悔する事は無い。

自分の命と引き換えに、この泣き叫んでいた少女を救う事が出来た。

ただ心残りとしては、ここが一体何処なのかを知り、仲間達や親友達に見取られながらの方が良い。

迫り来る女神像の前で、キラは微笑みながら目を閉じた。

だが

(……あれ？)

痛みや衝撃が来ない？)

あれだけの重量と高さなら、余り時間をかける事無くキラの身体を潰す事が出来るが、それが一向に来ない。

奇妙な現象にキラは首を傾げながら目を開けると、思わず再び驚愕してしまった。

「なっ!?!」

倒れかけていた女神像を、桜色に輝く帯が縛っているではないか。

キラの知っている科学では、こんな事はまず有り得ない。

そう、『知っている科学』では。

「これは……」

「大丈夫ですか!？」

「?」

何か別の、さっきの少女とは違う凜とした声に、キラはその声の方に顔を向ける。

そこには、女性がいた。

青いラインが入った白いドレスの様な服に、胸部に真紅の大きなリボン、亜麻色の長い髪をツインテールに結び、澄み切ったブルーの瞳をした女性。

右手には槍に似た形状の杖を持っている。

年齢としてはキラより四歳程若い。

この世界では知る人ぞ知る天才魔導師、高町 なのはだ。

だが、キラの思考はそこでは無かった。

(……人が、宙を飛んでいる?)

そう、声を発したなのは、何も無い中空を飛んでいたのだ。

原因は恐らく足首らへんにある桜色の翼だろう。

益々ここが何処なのか、キラは次第に悩んできた。

「あの、大丈夫ですか？」

中空に浮かんでいたのはが、いつの間にか地上に降りてきていた。

「っ……あ、はい。

大丈夫です」

「そうですか。

じゃあ、私に掴まってください」

そう言い、手を指し伸ばすのはだが、キラは手を掴もうとはしない。

「いえ、先にこの子をお願いします」

そう言い、抱き抱えたのは先程の青い髪をした少女。

今さっき何が起きたのか理解していなかったが、今は助けが来た事を理解しているのか表情に浮かんでいた恐怖が僅かながらに消えている。

「でも、それでは貴方は!？」

「…………時間が無い。
急がないとここも崩れます。
急いで下さい！」

言うや否や、キラは二人に背中を向けてオリンピックメダリスト
顔負けの速さで駆け去っていった。

「ま、待って下さい！」

なのははキラの白服に手を伸ばすも、既にキラは炎の向こう側に姿
を消していた。

「…………あの…………？」

「くっ…………。」

生きてて下さいね…………必ず、助けますから…………。

…………安全な場所まで一直線だからね！

”レイジングハート”！」

「了解！」

少女、スバル・ナカジマを託されたなのはは上空、正確には天井に
向けて右手に握っていた槍にも似た長い杖の切っ先を向ける。

”レイジングハート”の根元にある穴に、数発の弾丸カートリッジがリロードされ、根元に数枚の桜色の光の翼が生える。

「デイバインバスター！」

瞬間、極太の桜色の奔流が杖の先から天井に向かって流れ、天井に大きな穴を作る。

その穴からなのははスバルを抱いて、脱出した。

「……………くっ！」

あの女性高町　なのはと別れたキラは、煙を吸わない様に口に白服の袖を当てて姿勢を低くしながら長い廊下を疾走していた。

地図も無く、ただ目の前に空間があれば走っていた為に自分は今何処にいるのか解らない。

今こうしている状態で、今何処に誰がいるか、機体の在り処は何処でどうなっているかも解らない。

オマケに煙を少し吸ってしまったせいで、一酸化炭素中毒になりか

けている。

焦りと状況が、次第にキラの脳を犯していく。

その中で、キラは廊下の先で何かを見つけた。

紫色の半球体、その中には三人の人々。

キラはもう慣れたのか驚かない。

恐らく炎の熱や有毒ガスを防ぐ物と勝手に判断し、キラはその半球体に近づく。

今この人達を助けたら、まだいるかも知れないだろう人達を助ける事は出来ない。

地図もリーダーも、何も無い為にここから脱出するのも容易ではない。

この人達を救う事は出来ないのが堪らなく悔しい、というのがキラの本心だが、その本心を必死に隠して問う。

「大丈夫ですか!？」

「……貴方は？」

「……まあ、たまたまここにいた民間人です」

いきなりワープしてきました、何て自殺行為は出来ないので適当にごまかす。

「……そうですか……。あ、そういえば私達に防御フィールドを張ってくれた少女がこの先に行きました！」

「っ……解りました！」

一人の人物からの情報を得て、キラは半ばフラフラになった身体に鞭を打ちながら廊下の先へ駆けていった。

キラと入れ違いになる様に、突如防御フィールドの前の壁が金色の閃光で撃ち抜かれて誰かが出て来た。

黒と紺を基調とした服に白いマント、長い金髪をツインテールに纏めており、澄み切ったレッドの瞳。

右手には黒色の斧を握っている。

金色の閃光と呼ばれている天才魔導師のフェイト・T・ハラオウンだ。

「管理局です！」

「……っつですー！」

フェイトは声の聞こえた方に気付くと防御フィールドに守られている人達を見て近付き、フィールドに触れる。

「（長時間炎の熱と有毒ガスからこの人達を守ったから、かなり微弱になってる……）」バルディッシュ」

「了解。ディフェンサープラス」

自らの相棒は主の心情を察して、金色の防御フィールドを更にその上に展開させる。

「すぐに安全な場所にまでお連れします！」

「あ、あの……」

「……はい？」

「魔導師の女の子がバリアを張ってくれて、それから妹を捜すって……」。

後、民間人の青年がその女の子を捜すって、あつちに……！」

「え!？」

避難者の一人がフェイトの背後にある廊下を指差すが、フェイトは今それどころでは無かった。

魔導師の女の子は解る。

だが、民間人の青年の方は正直無謀と言っても良い。

魔導師も騎士も、民間人と同じ人間というカテゴリの中に入るも、

違いがある。

相棒であるデバイスを持っているか否かだ。

管理局の者はデバイスを持ち行動する事が許されるが、民間人の者はそうはいかない。

デバイスは使う者にとってはこの上ない程の脅威となるからだ。

管理局、民間人問わず使い方を間違えてしまったら自らのみならず周りの者にも被害が及んでしまうが、どちらがその可能性が高いかは解る。

ましてやそのデバイスを持っていない民間人が手伝うのは嬉しいが、逆に居た堪れなくなる。

だが今はそういう事を考えている余裕は無い。

フエイトは頭を軽く振ってマイナスな考えを追いやると、すぐに思考を切り換える。

「……解りました。」

皆さんを避難させたらすぐに探しに行きます」

「はあ、はあ、はあ……」

あれから、キラはまだいるだろう女の子を捜していた。

だが長い距離を駆け続けた上にこの熱波、更に有毒ガスの吸い過ぎでもう身体は限界に達しており、今意識を保って立っている事自体が奇跡だ。

スーパーコーディネイターとさえどコーディネイター、ナチュラルと同じ人間に過ぎない。

有毒ガスを吸い過ぎると身体が動かなくなるし、熱ければ汗もかくし脱水症状にも陥る事だつてある。

耐性はあるが、ただ強いだけで限界もあるのだ。

霞む意識と視界の中でも、キラは一步ずつ足を進めていく。

バル……。スバ……。

スバル……！

「ん？」

薄れ行く意識の中、確かにキラの耳と脳に何かが聞こえてきた。

炎の中にも聞こえてきた、という事は近くにいます。

キラは最後の力を振り絞り、軋む身体を動かしていった。

声を頼りにたどり着いたのは、薄暗い空間だった。

炎の熱は伝わらないが、爆発の音が反響する。

足場の床は酷く脆い。

下手に動いたら奈落のそこへ真つ逆さまだ。

そんな中、一人の少女がキラの視界に入った。

青くて長い髪をした所を除くと、先程の少女に似ている。

「大丈夫!？」

キラの声に反応したのか、少女はキラの方を向く。

「今行く!」

そう言った矢先、キラの視界は急にぼやけてきた。

「くっ……うっ……」

力ももう、入らない。

だが今ここで倒れたらまた後悔する。

救うと、守ると言ったのに守り切る事が出来なかったあの時みたい
に。

もう二度と後悔しないと決めたのに、また後悔するのにか。

だがもう意識も殆ど無いし、身体も動かない。

もう、成す術が無かった

「力を、求めますか？」

筈だった。

「え？」

声の主を探そうと周りをユルユルと見るが、声の主は”FAITH”の徽章からだった。

その声は、最愛の女性のラクス・クラインの声とほぼ似ている。

「君、は……？」

「今はそう問うている時間はありません。マイスター。もう一度言います。

力を、求めますか？」

”FAITH”の徽章からまた聞こえてくる。

だがその問いには、もう既に答は出ている。

「力を、求めるよ……」。

もう二度と、後悔しない様な、力を……。
でも、力だけじゃ駄目だ……！
思い、だけでも……！

「……マイスターのその思い、しかと受け取りました。

では、私の名前を呼び『セットアップ!』と言って下さい」

そして、キラはその名を言う。

さっきまで振るっていた、救うべき命を救い、守るべき命を守る自由の剣の名を。

「君の名前は……」フリーダム”……。

”フリーダム”、セットアップ!」

「了解!」

霞んだ声で叫ぶ様に言うと同時に、キラの身体を深蒼の光が包み込む。

苦しみが消えて、代わりに清涼感がキラの身体を癒していく。

光の中でザフトの白服と黒いブーツ、ベルトが粒子となって消え、代わりに別の服と装甲になっていく。

ザフトの白服の代わりに白と青を基調としたが燕尾服のようになったオーブの制服をその身に纏い、更に四肢と人体急所は鉄灰色の装甲を、背中にブースターと畳まれた八枚の翼が現れる。

両腰部には灰色の砲身とサーベルの柄、頭部と目は四本のアンテナのあるヘルメットとバイザーが覆い両手に二丁のビームライフルが握られる。

そして、目の前にあるウィンドウが出て来る。

MOBIL SUIT NEO OPERATION SIS

T E M

G e n e r a t i o n

U n s u b d u e d

N u c l e a r

D r i v e

A s s a u l t

M o d u l e

C o m p l e x

S e r i e s S D 1 0 0 - 0 9 S F / I J 0 1 - 3 4

1 5 2

Z . A . F . T

G . U . N . D . A . M C o m p l e x

文字とウィンドウが消えると同時に、鉄灰色だった装甲が純白に、関節部と胸部砲口と両手は黄金に染まり、胸部を覆った装甲は黒と青に変化、八枚の翼は深蒼に染まる。

V P S が展開されたのだ。

光が消えると同時に、キラは八枚の翼を広げてブースターを噴かせながら少女のいる階層へ慎重に舞い降りる。

そして脆くなつた足場に急激な重さを与えない様に、爪先からゆっくりと着けていく。

「大丈夫？」

「え……あ、はい……」

驚きながらも律儀に答える少女に、キラは笑みを浮かべる。

「すぐに行こう。」

「ここも直に」

「その人達、大丈夫！」

「「っ!?!」」

いきなり聞こえた女性の声に、二人は声のした方を向いた時だった。

ビキッ、ビキビキッ！

ボコッ！

いきなり二人の乗っていた足場に亀裂が走り、崩れ落ちてしまったのだ。

瓦礫と共に真つ逆さまに下に落ちていく二人。

「キヤアアアアア!!」

「チイッ！」

金切り声を上げる少女と舌打ちを打つ青年に、フェイトはすぐに高速移動魔法の一つ、“ソニックムーブ”をしようとした。

が、それは途中で止める事になった。

「掴まって!!」

「え!?!うわっ!?!」

特殊な装甲に包まれた青年キラが、すぐさま少女の腕を掴むと背中に抱いた八枚の翼を広げ、ブースターを噴かせながらその場に浮遊をしていたのだ。

「良かった……」

安堵の息を出すと、フェイトはすぐに二人の所へ舞い降りる。

「ありがとうございます。」

私は「

「すみませんが、自己紹介は後です。」

ここに残っている人は、まだいますか?」

キラに遮られて少し残念そうな表情になるフェイトだが、すぐに思考を切り換える。

「……大丈夫です。」

皆もう安全な場所に避難して、今ここにいるのは私達のみです」

「そうですか……」

目は装甲で覆われているも、安堵の息を吐く。

「あの、エントランスで逸れた妹、スバル・ナカジマも……？」

「うん。」

さつき高町　なのは教導官に保護されたって連絡が来たよ」

「……良かった……」

キラの装甲に包まれた腕の中で、少女は涙を浮かべながら笑みを作る。

妹思いだな、とキラは思うも、上から細かい瓦礫が降ってくる。

「急ぎましょう。」

「ここも直に崩れます」

「そうですね……」

二人は頷くと、真っ直ぐ天井に向かって飛び上がっていった。

小さな穴の開いた天井から脱出すると、二人の身体を心地よい夜風が包み込み、柔らかな月光が心を癒す。

月を見てみると、キラは装甲に隠された目を数回パチパチさせる。

淡い燐光を闇夜に照らすのは合っている。

だが問題はそこではない。

「月って、二つあったっけ？」

間違いであって欲しいという願いを込めた呟きは、どうやら抱き抱えている少女、ギンガ・ナカジマと隣で並行飛行しているフェイト・ハラオウンには聞こえなかったようだ。

こつちを向いてちよつと首を傾げている。

キラは急いでごまかすと、ゆっくり地上に両足を着けると、ギンガを安全な場所に避難させた。

だが、それから一転。

武器を持った複数の人物に囲まれた。

空を見ても、こつちに武器を構えた人がいる。

「ちよ、これは!？」

フェイトは何事か解らないと言った口調で問うが、答える者はいない。

なのも同じようにオロオロとしている。

そんな中、二人の人物が武装をした者達の後ろからやって来た。

一人は茶色い制服に銀色の短い髪をした壮年の男性。

もう一人は白と黒の西洋の騎士が着るような甲冑を着て、頭に白い帽子を被って、右手に金十字の杖を握った、茶髪のポブカットの女性。

そして、声を出す。

「時空管理局地上108部隊隊長のゲンヤ・ナカジマだ。

バリアジャケットとデバイスの解除及び出身世界と名前を言いな

「要求に答えられない場合は、武力を以って貴方を尋問させて貰います」

声高らかに言う中、キラはゲンヤが言ったある単語を聞き逃さなかった。

時空管理局。

聞いた事も無ければ見た事も無い組織の名称。

全貌が良く解らない以上、下手に動くかどうかは火を見るよりも明らかだ。

ここは従った方が良い。

マイスター。

私を解除しましょう

っ！

頭に”フリーダム”の音が！？

いきなり頭の中に”フリーダム”の音が聞こえて驚くキラだが、表には出さない為に察する事は出来ない。

これは思念通話。通称念話というものです。
やり方等は後で教えます。

マイスター、武装を解除するには私の名前を言って『リリース』と思えば良いですが、解除すると私を纏う前の状態になります

”フリーダム”を纏う前、というのはあの一酸化炭素中毒と脱水症状になりかけたあの時の事だ。

敵意を示すのは無くなるが、その分自分が気を失って倒れる事間違いない無しだ。

だが、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

解った。”フリーダム”、リリース

了解

キラの身体が、再び深蒼の光に包まれていき、装甲と服がどんどん消えていく。

清涼感も消え、逆に苦しくなっていく。

そして、完全に”フリーダム”を解除してザフトの白服に戻った時

には、キラの身体は地面に仰向けに倒れ伏していた。

「っ……おいつ!？」

しっかりしろ!！」

まさか倒れ伏しているとは予想していなかったのか、ゲンヤは慌てながらキラの身体を抱き抱え、容態を確かめる。

杖を持った女性、八神 はやても武装した者達も、フェイトもなのはもキョトンとしていたが、ゲンヤが言った声で意識を現実に戻す。

「急げ!

一酸化炭素中毒と脱水症状を引き起こしている!

手え空いてる奴あ速く病院に搬送しろ!

でないところの坊主死ぬぞ!！」

「っは、はい!！」

ゲンヤの鶴の一声で、周りの武装局員達が一斉に慌ただしく動きはじめた。

紅蓮ノ中ノ邂逅（後書き）

空白期間どつしよ……

翼休メル時 安ラギノ時（前書き）

今年最後の投稿です。

ちよつと焦りましたので、所々に変な所があります。

— 酸化炭素中毒については詳しい事は解らなかったので、不快に
思われた方は申し訳ありません

翼休メル時 安ラギノ時

あの大火災『臨海第八空港火災事件』から一日経った朝。

ミッドチルダの首都クラナガンにある高層マンションの一室の部屋のテレビが、昨日の事件の事を一般市民に伝えるべく知らせていた。

「早速現場を呼んでみましょう」

「はい。」

こちら現場です。

火災は今の所鎮火しておりますが、煙は未だに立ち上っている状態です。

尚、現在は時空管理局の局員により危険の調査と事故の原因の解明が進められています。

幸いにも、迅速に出勤した本局、航空魔導師部隊の活躍により、民間人に死者は出ておりません

」

ピッ

部屋の主がテレビのリモコンを押し、電源が落ちる。

部屋の主というのは、八神 はやてであり、その横には高町 なのはとフェイト・T・ハラウンが寝転がっている。

枕にははやてのちっちゃな相棒のリインフォースツヴァイが熟睡している。

「はぁ……。やっぱりなあ」

「……………どうしたの？
はやてちゃん」

「うん……………」

実際に事件解決したのは災害担当と初動の陸士部隊と、なのはちゃんとフェイトちゃん、そしてあのお兄さんやんか……………」

現場を見た者と、本部の中から見ただ者の違いがこれだ。

マスコミに恐らく誰かが圧力をかけて情報を捻曲げたのだろうが、三人は全く気にしていない。

「フフ……………」

まあ、休暇中だったからね。

お兄さんの方は解らないけどね」

「民間の人達は無事だったんだし……………」

あ、お兄さんの方はどうなったの？」

「うん……………」

あのお兄さんは、クラナガンにある総合医療センターに入院しとるよ……………」

担当の先生がこう言いとった……………」

『信じられないくらい酷い一酸化炭素中毒と脱水症状で、今こうやって生きてるのが不思議なくらいです…………』

この人の生命力と回復力に信じるしかありません…………』て……………」

「そつ……………」

「生きてると、良いね……。
あのお兄さん……。」

ミッドチルダの総合医療センターの医師の腕なら信じられるが、その医師をそこまで言わせる程の酷さとは、この三人には想像する事が出来ない。管理局の者は、普段任務を行う時等には防護服を纏いバリアジャケット炎熱と有毒ガスから守る事が出来るがあの場合場合は全くの別の話だ。

バリアジャケットらしきあの服と装甲を着ていた時は平気だっただろうが、それを解いた時に体調が元通りになるなんて聞いた事が無い。

「そうそう。」

あの人の持つとったデバイスやけどな、マリーから聞いた話やと、何も解らんかったんやて」

「あのデバイスが？」

マリー、という女性はマリエル・アテンザという本名でなのはヤフエイト、はやてのデバイスを改良してくれた人物である。

その人物が調べたにも関わらず、あの青年が持っていたあの銀色の羽根のバッジは何も解らなかつたのだ。

「うん。」

何をしても解らんし、何も答えてもくれへんかつたつて。解つたとしても、たった一つ。『キラ・ヤマト以外の起動、展開、行動、開示は一切認めない』とだけやって」

「そ、そんなデバイス聞いた事無いよ!？」

「……………次元漂流者」

フェイトが呟いた言葉に、なのははハッと気付く。

次元漂流者というのは、何らかの原因で違う世界から突然やってきた人物の事で、一口に説明をするなら次元レベルの迷子だ。

その人物の出身世界が、ここミッドチルダよりも更に発展した世界でも、魔法技術よりも科学が発展した世界でも、逆に魔法技術がミッドチルダの技術を更に発展させた世界であっても何ら不思議では無いのだ。

因みにその次元漂流者を保護し、また元の世界に帰らせるのも時空管理局の仕事だ。

「やっぱりフェイトちゃんもそないな考えが付いたか…………。」

キラ・ヤマトさんの昏睡状態と後遺症が治れば、ゲンヤさんが取調べをするらしい」

「……………そう」

「……………」

頷いて、青年の無事を祈る二人。

次元漂流者なものにも関わらず状況判断や自分の命よりも他の人の命を守るその姿勢に、何か惹かれるものを感じる。

「……………それでな。」

なのはちゃん、フェイトちゃん……………」

そして、はやては語り出す。

「私、自分の部隊を持ちたいんよ」

自らの夢を。

数週間後のミッドチルダ総合医療センター

首都クラナガンにあり、ミッドチルダの医療の殆どを担う病院の個室で、キラ・ヤマトが酸素マスクと点滴を受けながら昏睡していた。傍らにある棚にはキラが着ていたザフトの白服が綺麗に洗われて、綺麗に畳まれた状態で置いてあり、その上に待機状態の”フリーダム”がベルトと共に置かれてあり、ブーツはその棚の下に揃われている。

パシユーツ

自動ドアが開き、誰かが入ってくるが、キラはそれに気付く事は無い。

入ってきたのはギンガとスバル、そしてゲンヤのナカジマー家だ。

「お兄さん……」

「……」

「……自分の命よりも見ず知らずの他人の命を、か……。つたく、原始的だがそれこそ美しい考えをしゃがって……」

二人の姉妹と、悔しそうな声を出す父親。

実際、ゲンヤの心境は複雑だった。

あの時、自分の娘二人を助けてくれた時は正直嬉しかった。

だが状況が状況であった為、指揮官としての自分がその感情を一切排していた。

そして、いざ目の前にして見ると助けにくれたにも関わらず、ただ『未知のデバイスを持っていた』というだけで警戒してしまった。

仕方ないと言えば仕方ないが、せめてありがとうと言いたかったのがゲンヤの心情だ。

だが今言っただとしても、この青年には伝わらない。

昏睡しており、また昏睡から目が覚めたとしても一酸化炭素中毒の後遺症で何と言っているのか解らないだろう。

それでは意味が無い。

「さ、帰んぞ。

二人と
「

そう言い、帰りを促そうとした時だった。

「っ！お父さん！」

「お兄さんが目を開けたよ！」

「何っ！？」

慌てて二人に向けていた目を青年に映すと、確かに瞼が開いて澄み切ったアメジストの瞳が見えている。

焦点も合っている事から、意識もハッキリとしているのが解る。

「っ……ギンガ、スバル！」

急いで看護婦さんかお医者さんを呼べ！」

「はーい！！」

ゲンヤからの指示を受けたギンガとスバルは、バビューン！とオリンピック代表顔負けの速さで部屋から飛び出していった。

数分後

ギンガとスバルが急いで呼び出してきたキラの主治医が、キラが目覚めたという知らせを受けたので急いで一人の看護婦を引き連れてやって来るや否や、キラの身体を検査を始めた。

検査をしていくに連れて、主治医や看護婦の身体が驚愕に変わっていく。

「これは……………!？」

「……………何か？」

「……………一酸化炭素中毒は、かかると身体が動かなくなりそれで焼け死ぬ事が多々あります。

よしんば逃げる事が出来たとしても脳に後遺症が残り、最初の一ヶ月は歩く事や簡単な計算も出来ません。更にその後一年は後遺症で苦しみます」

ですが、と続ける医者に、三人は目をギラギラさせながら聴き入っている。

「この人にはそういつた後遺症は一切見当たりません……………。今は満足に身体が動かす事が出来ませんが理解や、食事等も出来る程回復しています。

医者として私も長いですが、これ程の回復力を持った人は見た事はありません」

それだけ言うと、主治医は看護婦を連れて出て行った。

その場に残されたのは、ベッドに楽な姿勢になり、酸素マスクを付けたままナカジマ一家を見ているキラと、医者からの容態の説明を聞いて、そのキラをジィツと見ているナカジマ一家が残された。

「まあ、俺の娘達を助けてくれたのはありがたいな」

「……………」

頬を掻きながら言うゲンヤに、キラはコクリと頷いて聞こえて理解した事を示す。

だいぶ回復したとはいえ、まだ喋る事は難しいらしい。

「あ、俺の名はゲンヤ・ナカジマだ。

こっちの髪が長い方は姉のギンガで、髪が短い方が妹のスバルだ」

「ギンガ・ナカジマです」

「す、スバル・ナカジマです」

「……………」

キラはまた聞こえた意味で頷くと、傍にあつたメモ帳とペンを取って、サラサラと何かを書いてゲンヤに渡す。

「ふむ……………」

キラ・ヤマトっていう名前か……………」

単刀直入に聞くが、お前は次元漂流者か？」

「……………?」

『次元漂流者』という聞き慣れない単語で、キラは軽く首を傾げる。それを理解したゲンヤは、軽く苦笑を浮かべて説明を始める。

ギンガとスバルの姉妹は二人の話し合い(?)を聞いている。

「まあ次元漂流者ってえのは、何らかの原因で別の世界からいきなりこの世界のミッドチルダにやって来た人物の事だ。

まあ世界的、次元的な迷子と考えても良いな」

「……………」

成る程、という意味で頷くキラだが、それと同時に今の自分の酷く立場が弱い事が解ってしまった。

愛機である”フリーダム”は今ここにあるとは言え、この世界にある法がどういったのか解らない以上、どう動いて良いかが解らない。というかその前にミッドチルダの文字や通貨がどういったのか解らないのならこれからどう生活すれば良いのか。

「……………っと、もうそろそろ時間だから今日は帰るな。

まあ、これからの詳しい事はまた後で話そうや。

じゃあな」

「また明日。ヤマトさん」

「さよなら」

面会時間の限りが来たらしく、ナカジマ一家はゆっくりと個室から出て行った。

独り（？）になったキラは、窓の外から見える夕日を見遣る。

何か物思いに耽ってますね。マイスター

うん……。正直言って今の僕には国籍も、居場所も、お金も何も無いから……

完全に回復して、またゲンヤ様が来られた時にこれからの身の振り方を考えるしかありませんね……

うん。

無一文になってしまった僕だけど、ついて来てくれるかい？”フリーダム”

当たり前です。

私が望むのはマイスター自身の幸福しあわせであり、他は何も望みません。

ありがとう、”フリーダム”

自分はキラ・ヤマトの影。

自らは何も望まず、ただマイスターであるキラの為に存在し続ける。

自由を意味する言葉を冠する相棒の決意と覚悟にも似た励ましを得て、キラは酸素マスクの中で僅かながらに笑みを浮かべた。

翼休メル時 安ラギノ時（後書き）

では皆様、良いお年を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8335z/>

魔法少女リリカルなのは StrikerS 天空ヲ舞ウ白キ自由

2011年12月31日23時52分発行